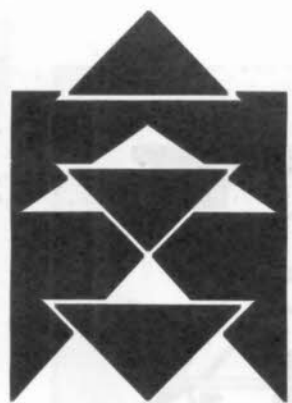


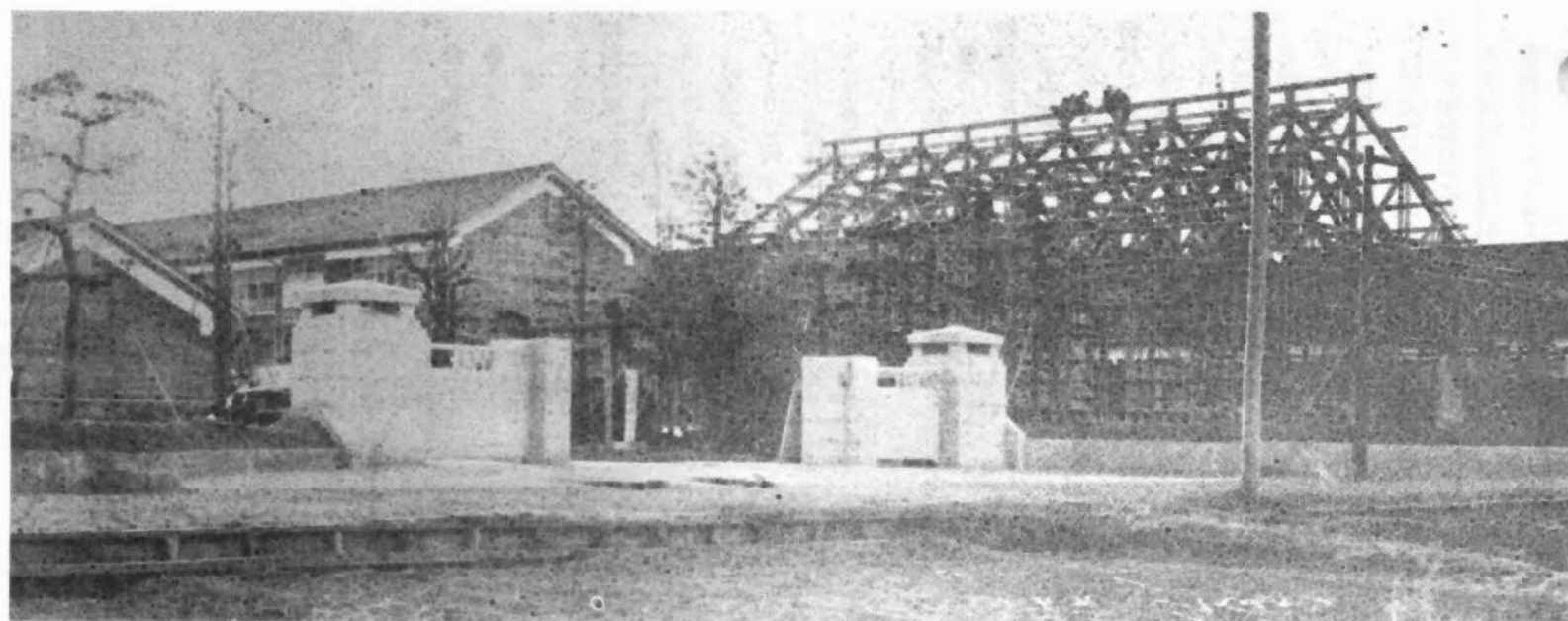
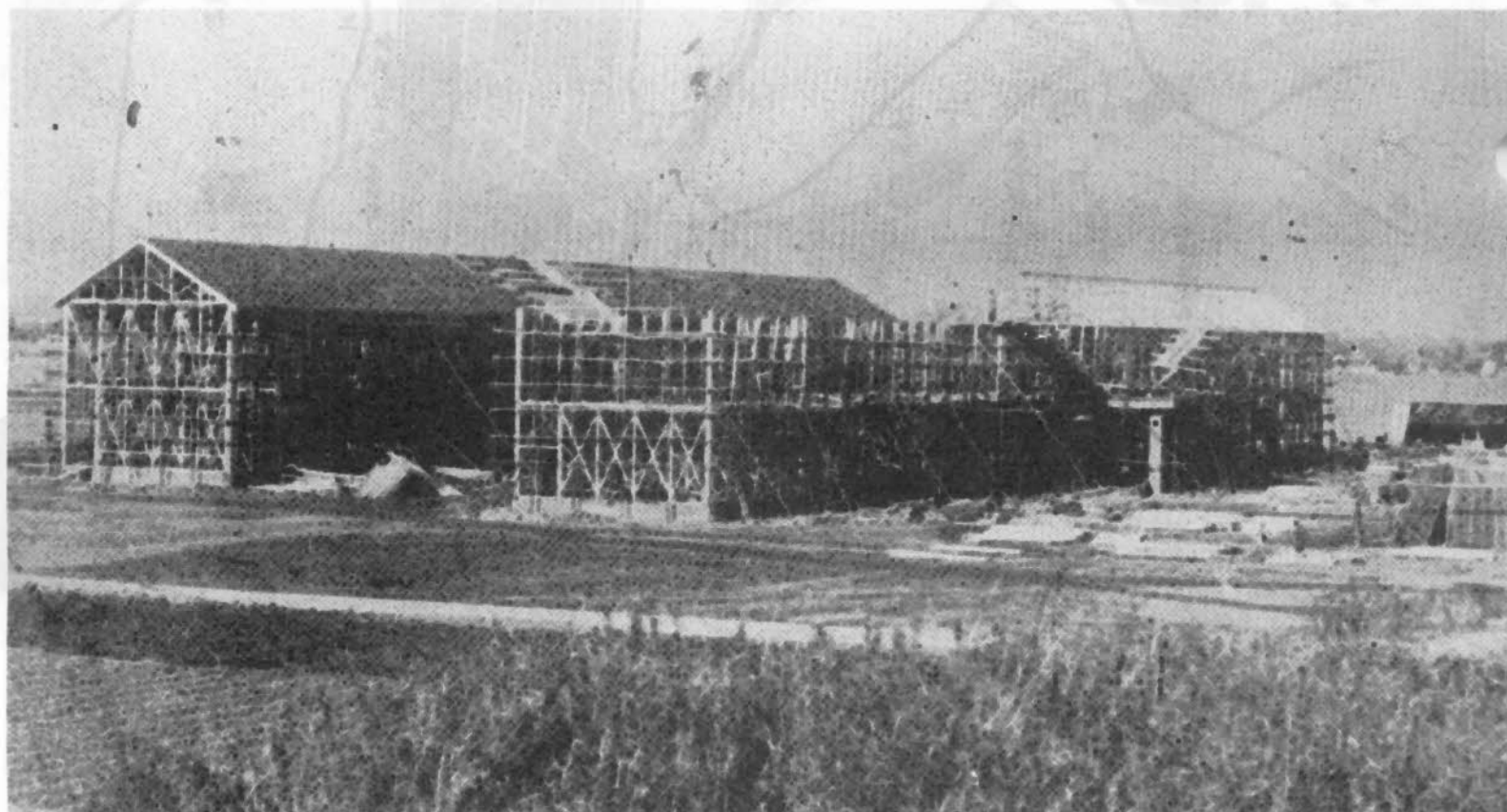
1996



高崎高校同窓会報

第30号 平成8年11月30日

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074





GRAPH FILE

◎表紙の写真

乗附校舎建設中 (上) 昭和13年
旧講堂建設中 (下) 昭和15年

◎表紙裏の写真

高崎市から片岡 (乗附) への地図 昭和15年

写真提供/岩山 猛 (49回)

現在地に木造によって建築された校舎。
二階建のこの校舎は、昭和49年の取り壊しまで、
使用された。
上の地図は、中学として記されている。

高高同窓会報 No. 30 目次

あいさつ	創立百周年を前にして……………同窓会長 小山 禧一	4
ごあいさつ……………	ごあいさつ……………学校長 古川 功	3
先生・子供しての良きパートナーを目指して……………	PTA会長 加藤 勝二	4
母校創立百周年のために……………	同窓会副会長 横田 英一	5
新任のあいさつ……………	教頭 本多 嘉実	5
新任のあいさつ……………	通信制教頭 高橋 洵	6
●叙勲者紹介……………		6
●卒業生の作品紹介12……………	原 一雄	6
論壇		
「メディアに抜かれたほくらの剛毅」……………	佐藤 良明	7
特別寄稿		
三八会と恩師並びに校友……………	石田 文次	8
高高の友人達……………	染谷 欣一	9
高柳記念賞を受賞して……………	清水 宏紀	10
ブレ100周年		
常任委員会より……………	重田 精一	11
事業委員会活動報告……………	須水 孝	12
総務委員会より……………	田中 順	12
募金委員会活動報告……………	横田 英一	12
●刊行案内「高崎高校百年史」……………		13
同窓会だより		
「翠碧育英会のあゆみ」上梓刊行……………	田中 順	14
高高五十年作品展のご案内……………	石原 征明	14
母校だより		
各部の活躍……………		15
各部の活動……………		16
翠碧祭・高前定期戦……………		18
翠碧文庫……………		18
最近の進学状況について……………		19
人事異動……………		19
同窓会会計報告……………		20
新年総会のご案内……………		20
第2回同窓会ゴルフ大会報告……………		20
事務局だより……………		20



創立百周年を前にして

同窓会長 小山 禧一

昨年に劣らない程の今年の暑い夏も終わり、虫の声のさわやかな夜にほっとする季節となりましたが、同窓の諸兄におかれましては相変わらずご健勝のこととお慶び申し上げます。

また、毎年のことながら各界各方面における同窓の諸兄のご活躍を耳に致します機会が多いのでありますが、同窓会と致しましても、誠に心強く、ご同慶の至りでございます。

なおまた同窓の諸兄も新聞等でご覧のことと存じますが、最近の高高生の学業・運動の両面にわたる活躍には目を見張らせるものがございます。この成果の蔭には、申すまでもなく限られた時間の中で、精一杯後輩生徒のご指導にあたられておられる先生方の大変なご苦勞があります。同窓会を代表いたしまして、この紙面をお借りして母校の先生方に感謝申し上げる次第であります。

さて、母校高中・高高的創立百周年記念日もいよいよ半年後（平成九年五月二十日）に迫ってまいりました。

事業委員会で立案企画していただきました同窓会館（仮称）の建設も急ピッチで順調に進んでおります。この会館はこれから高高に学ぶ後輩のため、同窓生約二万数千の諸先輩と地域の方々

篤志寄付を仰いで建設されるものでございますが、県下にはほかに例を見ないすぐれた文化施設であります。まことに百周年記念事業にふさわしい記念の建築であると、同窓会と致しましては自信をもって皆様に披露いたしたいと存じております。

また総務委員会で担当しておられます学校史の編纂事業ですが、順調に推移しているとうかがっております。上巻は編年体、下巻は列伝体という体裁を合わせ持つこの校史は他の高等学校の校史には例のない画期的なものといわれております。完成上梓の日が待ち遠しく思われますが、それぞれの執筆編集に携わる諸先輩の、なみなみならぬご苦勞に深謝申し上げます。

そしてこのような百周年記念事業を支える、何よりも肝心な募金委員会の活躍には厚く敬意を表しなければならぬと思っております。一口に二億二千万円と申し上げても、これだけで高額のご寄付を頂戴することは並大抵のことではありません。特に長引く不況の中での寄付活動はさまざまな障害があるかと思えます。横田募金委員長をはじめといたしまして各期の募金委員の諸先輩には、言葉では言い尽くせないご苦勞をおかけして

いることと胸が痛みます。この紙面をお借りいたしまして募金委員会の諸先輩に敬意を表しますと同時に、より多くの同窓諸先輩の皆様には、この募金に対するご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

まことに人生は朝露の如しと申します。私たちはいやがおうでも順番に、先人がそうであったようにこの世という舞台から去っていくかなければなりません。その時、在世の記念として人はさまざまなものを残してまいります。自分たちが学んだ母校に立派な講堂を残して、後進の青少年の勉学に資するということもその内の一つに数えられるでしょう。どうかこの趣旨にご賛同いただきまして、この百周年記念事業に一人でも多くの高中・高高的卒業生が参加、ご協力されますことを心から願う次第であります。

まことに言葉ととのいませませんが、同窓諸兄のますますのご発展とご健康をご祈念申し上げます。同時に、来年の母校創立百周年記念事業の成功をお願い申し上げます。

（美峰酒類株式会社取締役社長 42回）



ごあいさつ

学校長 古川 功

同窓会員各位の精神の紐帯として貴重な役割を担う同窓会報が、第三十号という記念の節目をもって刊行されますこと、心からのお慶びを申し上げます。

と同時に、常日頃母校の教育振興に多大な御支援御協力を賜り、とりわけ目前に於ける創立百周年への多彩な記念事業の推進に、まさに同窓会あげての絶大な御尽力御後援を賜っておりますことに衷心より深く御礼感謝を申し上げます次第であります。

おかげ様をもちまして、母校は着実な発展をみせており、県当局の特段の御配慮による環境整備も、百周年に時を合わせるように、昨年は管理棟校舎が、本年度は体育館大規模全面改修がすでに完工をみており、懸案の教室棟改修も平成九年度にはと、期待されておるところであります。

こうした幅広い御支援により、生徒達も、創立百周年の本年にふさわしい活躍を展開し、本誌所収の如く、国体、インターハイ、全国大会等の他、各種コンクールコンテストでの数多の受賞入賞等とともに、例年通りの高水準の進路達成度維持を果たすなどの、高高らしさを発揮中であります。

これらはまさに同窓会をはじめとする

関係各位のおかげでありますとともに、職員の方々の指導のもと、校是である「三F精神」を体して「当たり前」のことに当たり前にやり抜くこと」に努めた生徒達の努力の成果であります。ぜひこの勢いを保持して、創立百周年の歴史と伝統に恥じぬ有為な人材の育成を期し、あわせて本校生にふさわしい真の社会性の涵養に努めたいと存じます。

一方、若年世代の急減化は本県においても加速度的な進行を見せており、県教育委員会主導のもと、各種の改革諸施策が推進されておりますが、本校に直接関わるこの一つとして、このほど普通科大規模校の一学年八学級制が正式決定となり、本校でも九年四月入学生から適用となりますが、これを積極的に本校教育充実の契機ととらえ、六十五分授業定着に加えて生徒ニーズに対応した授業編成への工夫等を図り、もって高々伝統の進取精神を堅持し本校への大きな期待と信頼に込めて参る所存であります。

なにとぞ今後とも変わらぬ御理解御後援を賜りますようお願い申し上げます。あわせて、母校同窓会の一層の御発展と会員各位のますますの御健勝を心から記念申し上げます。あいさつとする次第であります。



先生・子供しての良きパートナーを目指して

PTA会長 加藤 勝二

正門をくぐると右手に建設途中の同窓会館の姿が目に見え込んでいます。

創立百周年記念式典を来年の五月に控えて着々と準備が進んでいます。これも偏らに同窓会員の皆様の努力の賜物と心から厚く感謝申し上げます。

さてPTAの事を報告申し上げます。PTA活動は次の各委員会毎に運営されていきます。

学年保護者会は各学年別に年二日開かれます。生徒の生活・進路指導について学年全体及び学級別に先生と保護者が真剣に話し合います。この集会には八割以上が参加します。この熱気が進学率の向上に一役かっています。

事業委員会は年三回朝の通学時のマナーアップを推進しております。

セミナー委員会は子供に負けじと親も研修する場です。

第一回セミナーは京都大学教授の蘭田稔先生に「死を見つめる心 生命を考えるために」と題して、又第二回セミナーはペインクリニックの小笠原一夫先生に「一人では生きられない、一人では死ねない」と題して生と死に真正面に取り組んでいる姿に感銘致しました。

第三回は進学セミナーです。受験勉強に明け暮れている子供にどのように対処したら良いか経験豊かな先生に保護者がレクチャーを受けるセミナーです。

広報委員会は年三回「爽風」を発行しています。熱心な女性スタッフが東奔西走して新企画の記事を取材しています。

これらの各委員会をバックアップしているのが実行委員会です。メンバーは地区役員・正副学年委員長・本部役員が参加して運営しています。この委員会も優秀な女性スタッフが中心になって活躍しています。

本校の現役合格率は県内トップを独走しております。又県高校総体も連続三位と素晴らしい成績を納めております。経験豊かで研究熱心な先生方の指導、それに懸命に応える子供達の努力による成果と感嘆する次第です。私達PTAも両者に負けぬ様努力して参りたいと存じますので、先輩の会員皆様には何とぞ若い後輩達のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

(加藤税理会計所長 62回)



母校創立百周年のために

同窓会副会長 横田 英一

昭和六十三年に同窓会の副会長という大役をおおせつかつて早九年になろうとしております。その間、果たして母校のためまた同窓会のために、如何ほどのことを為してきたかと振り返りますと、内心忤怩たるものがあります。

さらにまた、母校の創立百周年を来年に控え、その記念事業の募金委員長という大変な仕事を頂戴いたしましたして身の引き締まるような思いがいたしております。同窓会、母校高崎高校にご迷惑をかけないよう同窓諸兄のご協力を仰ぎながら、一所懸命取り組んで参りたいと思っております。

思えば、私が高崎中学に入学いたしました昭和二十年は、その八月十五日に終戦を迎えました。そして終戦直後の混乱のさなか、六年間を高中・高高で過ごさせていただき、昭和二十六年に新制高校を卒業させていただきました。その間、物心ついてからの皇国日本から突然の民主国日本への変貌は、とても言葉では言い表せない衝撃でありました。また、近年ではおそらくもつとも貧しい少年時代を過ごした私た

ちの世代は、その後日本の歴史上もつても豊かな社会に思いがけずにも暮らすことができました。

これら筆舌に尽くしがたい経験を積んできた私たちは、母校高中・高高に對する思いもまた格別のものがあります。しかしまた、もうこんな混乱と騒動は私たちだけで十分だと思いは高中・高高卒業生五十期前後の同窓諸先輩の共通した感慨ではなからうかと思っております。平和で明るく文化的な社会こそ本場に尊いと心から思います。

母校高崎高校は来年めでたく百周年記念式典を挙行いたしますが、小山会長を助けて立派なお祝いができますよう、微力ではございますが全力を尽くしてまいりたいと思っております。

(群馬トヨタ自動車)

代表取締役社長 50回)



新任のあいさつ

教頭 本多 嘉実

高崎高校ブレ百周年の平成八年四月に着任いたしました。百周年を一年後にひかえて、学校全体に意気込みと活力が感じられ、その中に新たに加えていただいた者としては身の引き締まる思いとともに、その責任の重さを痛感させられております。

五月の高校総体において、総合三位の成績を昨年に引き続き獲得したことに見られるように、生徒たちは活発に活動しており、翠濤祭や定期戦への取り組みはもとより、進学実績面でも好成績をあげております。これらの本校の充実した活動を同窓会やPTAの方々の積極的な活動やご協力が支えてくれています。

特に、創立百周年事業としての記念会館の建設にあたり、その組織力・積極的な同窓会の取組状況には敬服させられております。多くの同窓会員の方々が、ご多忙の中にもかかわらず、時間や労力面だけでなく、会館建設のための経済的なご支援にも積極的に取り組んで下さっていることに、頭の下がるおもいを感じております。

記念会館は一月中旬の完成を目指して、着々と工事が進行しています。四百名を収容できるホールが、同窓会の方々のご尽力で完成間近になっていきます。体育的活動の場として体育館が重要なように、文化的な活動の場として会館(ホール)が必要ですが、それを所有している学校はほとんどありません。お蔭様で、そのような会館を、創立百周年の年から、本校では利用できないことになるわけです。

生徒や同窓会・保護者の方々の集いはもとより、講演会・発表会・地域文化活動等に格好の場を提供できることになりました。文武両道を標榜する本校にとつては、誠に相応しい施設を建設していただいたことになりました。

四月以来、多くの同窓会の方々にお会いしてお話を伺う機会がありました。その度に、母校に対する熱い思いを感じさせられ、教育の原点に触れるような感動をしております。今、目の前にいる生徒たちにも、母校に対する同じ思いを抱かせたい。そのために、活力ある学校づくりに励みたいと思っております。



新任のあいさつ

通信制教頭 高橋 洌

この度の人事異動で高高・通信制にお世話になることになりました。

和田橋から、観音山の眩いばかりの新緑のふところに抱かれた正門をくぐると、校舎を取り巻く銀杏の並木、樺の巨木、ヒマラヤシダの和らいだ新芽の歓迎を受け、実に緑の多い学び舎だなど感慨にふけるとともに、四十余年前の高校時代の記憶がよみがえってまいりました。

あらゆる面での善き「ライバル校」前高へ入学の前年に不慮の火災で校舎を全焼したため、定期戦で三年間高高に通い三連敗の憂き目にあつたのでした。当時の前高には、吹奏楽部がなかったもので、高高的の吹奏楽演奏での母校の校舎の合唱など実に羨ましい限りでした。

また、中学の同級生尾崎君が高高に入学したので、文化祭や薔薇の花見にも何度かお邪魔させていただいたことがあります。一面の、色とりどりの薔薇の花に包み込まれた教室で学べる友は、幸せだなど思つたものでした。当時はラグビーの黄金時代で国体の制

覇などもあり、まさに文武両道の精神を謳歌していたように思われました。

その折に、よく話題に上つたのは、哲学者田中悦平校長のことでした。高教育目標の「三F精神」は、生徒会の時間での訓話「高校生の倫理 三F精神について」という題で話されたことに由来すると聞き、三Fの池の噴水をより感慨深い想いで、眺めながら毎日の仕事を進めております。

高高的の創立百周年、前高との定期戦五十回、通信制も昭和二十三年に国語科一科目のみで開講して以来、五十周年を迎える記念すべき年に当たります。

大きな節目の年に高高的の一職員として、勤めさせていただけることを誇りに想い、二十一世紀を展望しつつ、「いつでも・誰でも学べる」生涯教育の観点から、微力ではありますが通信制教育に全力を尽くす所存でございます。

高高同窓会の更なるご発展を祈念いたします。ご挨拶いたします。

卒業生の作品紹介 12

私の著書について

原 一雄



私は先般、私の歌の師の事を書いた「鬼人橋本徳壽」を出版致しました。また先に井上房一郎さんの財団法人哲学堂設立の会の出版した「土屋文明私観」が4,000部も刷りましたのになくなってしまい、未だに読みたいと言ってくる人があります。ところが東京の高崎高校の卒業生である田村雅之氏のやっている砂子屋書房が、再刊してくれることになりました。100枚程書き足しましたが、今年中には出版されると思います。

尚上毛新聞社から前から依頼されておりました「自叙伝」を目下執筆中です。之も今年中にはと思っております。尚私の次の歌集「惜冬抄」も今年中には仕上げたいと思っております。あと二冊「吉野秀雄」と「江口きち」について準備中です。いずれ出ると思います。(歌人 29回)

叙勲者紹介

春の叙勲

●勲五等双光旭日章

〔検察事務功労〕

松本 清(77) 第35回

●勲五等瑞宝章

〔専門工事業振興功労〕

串田 光夫(73) 第39回

秋の叙勲

●勲四等瑞宝章〔建設行政事務功労〕

斎藤 謙蔵(70) 第43回

●勲五等双光旭日章〔教育功労〕

山岸 公一(73) 第40回

●勲六等瑞宝章〔とび工事業技能功労〕

黒川 宗輔(75) 第38回

ほかが高高に通ったのは、昭和四十年代の前半のことである。同窓のそれぞれの卒業期がそれぞれに時代の変わり目を生きてきたわけだろうけれど、「激動の」という枕詞がつく四十年代は、校風・気風の変化もまたずいぶんドラマチックであったと思う。下駄履き最後の世代にして最初の深夜放送世代。ポロのズックカバンを肩から長く垂らしながら、頭の中にはロックのビートをたぎらせているというアンバランスの上に僕らの学園生活はあった。

もって演じる。ほとんど土民の儀礼といった趣である。だがその種の野蛮さは当時すでに、メディアによって単なるイメージへと作り替えられていた。主な犯人はポップ・カルチャーである。あの、木の外階段のきしむ合宿所へ、後輩のしこきにやってきた大学生も、夜はナイロン弦のギターでアメリカのヒットソングを奏でた。ピートルズ来日の年に、「軽音楽」なんぞにうつつを抜かすのは「タマなし野郎」の最たるもの、といった感覚はすでになかった。一時期、不良扱いされたエレキギターが、NHKでも響くようになり、ハードロックのLPを買いまくっているなんていうリッチなやつもでてきていた。

論 壇

メディアに抜かれた ぼくらの剛毅



佐藤良明

TBSラジオ「バック・イン・ミュージック」で高前定期戦が異様な盛り上がりを見せたのは、ぼくが三年生の秋のことである。今もさまざまな地方出身の(二、三年下の)人たちから、「佐藤さんでナチ・チャコ・バックに投書してたの」とよく笑われる、深夜放送史の輝ける一ページだ。

ぼくらはウケを狙い、様々に脚色を施した学校の姿を紹介した。

・・・高前に参上するにあたり、前高生は以下のことに注意すべし。一つ、ネズミの餌を忘れぬよう。(チャコの声「ネズミがいるの?」ポロ校舎ゆえ、四十七匹のメスが暴れております。

・・・大学不合格率なんと七十四%! (チャコ「そんなこと自慢しなくたって!」高崎の街には浪人があふれ、あるものは東京におもむき、ありとあらゆる予備校で高高旋風を巻

き起こしているそうでありませう。この豪傑高生に比べ、インボの明前高生は、北関東随一を誇るモードの殿堂(傍白「おいおい、モードの殿堂だよ」高崎フランス座の外人モード特出などを見に、こっそり高崎の街にしのびこんでいることではありません!)

ぼくの秘蔵のテープからおこした、二十七年前の投書の一節である(前半は友人の作)。このあと何枚かのホラとジョークと挑発が続き、「パンカラな君も暴れて高高またよし」という野沢那智氏のコメントが入って、森山良子の「この広い野原いっぱい」が流れる。

「パンカラ」が、音楽とともに深夜の勉強部屋を包む幻想のイメージとなったわけだ。その一方で現実のぼくらは、たぶん急速に軟弱化しつつあったのだろう。あまりの汚れにこわばって部屋の床に立っているラグビー・ジャージも、大雨が降るとあふれ出す汲み取り便所も、みんなの過去のものになりつつあった。昭和四十四年、全国の深夜族の人気者になった高前で、それまで持ちこたえていた何か「ツプセー!」の「ヘタマン」に象徴されるものが「ガラガラ」と崩れた。

そしてストープが入り、下駄が消えた。こんな変化を徐々に積み上げながら、高前は今に至っている。で、その行き着いた先は？息子が通い出すようになって、ぼくもたまに覗いては見るのだが、手応えの希薄さみたいなものを感じてしまうのは避けられない。高々がそうだ、ということではない。日本全体がそんな印象なのである。

トランジスタラジオが、ハイファイ・ステレオに、さらにウォークマンへと進化して、カッコよさと気持ちよさが時空に満ちた。列強の軍事衝突も、イデオロギーの対立も、資本家と労働者との対峙もない、ただひたすらに白くてのびやかな世界にパブルが膨らみ、そして弾け、

子供たちは高度イメージ資本主義下の消費者としてさまざまな魅力と気持ちよさの中へ吸い込まれていく・・・これは世界の先進メディア社会全体に共通して起こった出来事である。

息子が高高に入って知った。今年が高前定期戦第五十回記念大会だそう、TBSが現場中継するという。懐かしの人気シリーズ再訪というノリである。ラジオをつけたら、リポーターが母親たちにインタビュウしていた。「ほんと、パンカラって感じで、いいですねえ」。

うそつけ、である。グラウンドには、現代のよい子らが、洗いたてのTシャツを着て、素直な笑顔を見せているにきまっているのだ。懇切丁寧な受験指導のもと、ロックを聴いて元気を付けて参考書に向かう平成の高校生に、それ以上どんな面構えを望むことができるというのだろうか。

メディアがはびこり、情報と映像とサウンドが休みなくシャワーとなって降ってくる環境は、戦中戦後のハードな時代を生きた人には、ひ弱な、現実感を欠いたものに見えるかもしれない。でも一面、これはそれまで考えられなかったほどパワフルできつい環境でもあるわけだ。そしてそこは、かつてのようなタマは不要になったかわりに、迅速なアクセスと軽快なフットワークが必要になる。ポップであること、ノリとウケにおいて秀でることは、今や絶対の要請だ。

英語教育のポップ化に向けて、ぼくは毎週大でビデオ編集機をいじり、コンピュータを叩いている。ゆつたりとした昔の時間は、もう大学にもない。

(東京大学教養学部教授 69回)

三八会と恩師並びに校友 (寸記)

昭和十九年当時の筆者



石田 文次

三八会の発足と経過 卒業回数を探つて名付けた会の者達は、奇しくも上和田地の旧校舎で最終学年(二期)を送り、新(現)校舎での最初の卒業生となる。入学以来経ること六十有二年。

戦後小倉館なる場所が開かれてより半世紀、今年も既にビュッホテルで六月時開かれたが、惜しくも皆出席をこ自慢なされて居った市川先生の追悼会ともなつてしまった。

戦後は年毎欠くことなく開かれていと云うのも、恩師市川三郎先生のご厚恩を柱とし、それを支え締め役を果たして来ている重田・林・桜井・清水幸(近年物故)の常任幹事に因ること大である。

恩師市川三郎先生 先生は昨私の地元磯部でお世話した会にはお元気で出席なされたが秋口より体調を崩され加えて昨暮の奥様のご死去により、そのお後を追われるように、お子様方多くのお孫さん達に見送られ八十六才の教育一筋であったご生涯を閉じ、我会員らも多くの参列者と共に永遠の別れを。

先生はかつての東北帝大文学部国文学科を出られ、大学に居残るようにとのお誘いを断り帰郷、パリパリの青年国語教師として赴任されたのが、私達入学一年

前そして私達の卒業に合せ中国大同中学校の副校長として迎えられ、終戦まで大陸へ。尚私など四・五年と続けて組を受持つて頂き世話になる。そんなこんなで、高中での師弟関係の縁が、三八会員が最も深くなつた。

二年次より国文法・続いて古典を四・五年次には現代国語で特に現代作家(論)などの授業を受けたが、文科面には弱い私など大いにしごかれたのであった。辞句熟語の意味を調べて来いと云われ、やつて来ましたと一つの解釈を答えるところもある、あ、もあると幾つもの解答を示され、一つの解釈位で満足してはと叱咤されたことなど思い出される。お蔭で嫌いだった古典特に文法の動詞活用形など今でも口に出る。

生涯今迄に多くの先生方に導かれ、私も理科教師の職に就くようになったが、授業には厳しく、人間付き合い、誰彼となく優しくが指針となつた。

時代背景と三八会員 中学時を中心に青少年期を過した一九三〇年代は私達を含め日本人にとって特異な形相に接して来た時代：昭和維新を叫んで青年将校の躍起は「汨羅の湖に波騒ぎ、巫山の雲は乱れ飛び…」を謳歌、憂国の思想が鼓舞

され出したのが二年次終了前、三年時に日支全面衝突、日本は引くに引かれず中国全土を押えんとし、世界が植民地化時代から変わろうとしていたことなど考える日本人、況や私達中学生など殆ど無く、

日本はアジアを救うのだと云われそれに向つて邁進あるのみであった。だが多感なりし青年期に差し掛つていた頃だけに将来をいろいろと考え心は揺れ動いていた。国の行く末に就いても大いに憂い、

学年が進むにつれ、将来の志望に絡み軍関係に進むのだ等と囁かれることが多くなつた。中には手取り早くと予科練を志願し、早々と私達と袂を分つ者三人程居つた。早くからと云えば、海軍士官を固く志していた安中の猪狩君が居つた。

憂国の青年猪狩進君 猪狩家は嘗つて安中板倉藩の世、代々郡奉行と云う要職を勤められていた家柄で、現旧邸と云う町内の一角に往時その佞の姿を留めている武家屋敷(現安中市重文)に御六代目の御曹司として生れ、厳格なる祖父の膝下で養育され育つ。

その祖父と云えば気骨ある国漢教師として私達入学寸前迄水く勤められる、自転車通学でかじかんだ両手をお尻の下に置き授講、「その授業態度は」と大声一喝、あの時は度胆を抜かれたと亡兄の話などからも…。生れ・育ち・頭脳三拍子揃つていた進君、現下の国に対処しての将来像と云うものが自ずと培われて行つた。

四年生になるのもどかしく、春の関西修学旅行にも目もくれず勉学、見事海兵行きの目的を果し江田島入校。

その年の暮れの二期期末、初めての帰省の折、母校へと来たり、並居る同上下級生を前に講堂の壇上より「憂国の士よ我に続け」と凛々しい腰の短剣姿での雄叫びとも思えた呼び掛け、あの姿・声今でも私の耳目にしかと残っている。

通学方法こそ違え、背格好と云い、確水出身と云い、同じようであったので三年次頃まで親しく付き合つていた彼と私との出会いこの時が最後となる。

晴れて海軍士官に任官、戦艦「比叡」などの艦乗勤務に励みしが、時運我が方に利あらず戦局急を告げるようになるや、持ち前の憂国の心情がこの仮ではと航空隊に駆り立て、九九式艦上爆撃機に乗り込み空の守りに、編隊(九機)を指揮し索敵、敵艦必殺を期して、部下一人と母艦「隼鷹」より飛び立ち南太平洋上に散華帰らぬ人となる。時に一九年六月一日、少佐に昇進、若冠越えて二才であったと。(同じ理科教師で同僚の四一回生の義弟及び故関口五郎会員談。)

齢の巡り合わせとは云え、卒業してより学徒出陣とが輪をかけ、可有為の多くの人材、惜しき命を失わせ、初会には三分の一(一クラス分)は欠け、今年に入りても既に三人を失う、寂しき限り、秋彼岸を前にして改めて合掌し筆を置く。

高高的友人達

染谷 欣一



入学試験は口頭試問だった。太平洋戦争で、物資が不足している為と聞いた。試験官の何かの質問に答えた時「おめえ頭がいいな。誰に教わったんだ。先生は涙を流して喜ぶぞ」と言われ、これはまずい、的外れな答をしたな、オレは落ちる、と思った。そんな風にして入った高中だが、途中五カ月の中断はあったが、学制改革で六年在籍した。多感な青春を六年も過ごしたので、思い出も色々あるが、今に残る物は、貴重な友人達である。

徒然草に、良き友三つあり、一に物くるる友、二にはくすし、三には智恵ある友。とあるが、小生この良き友に恵まれている。

一、物くるる友。今、物は不足していない時代だから、事ある時に力になってくれる友、と解すると、大いに恵まれている。小生のような者を頼って来る人もいるが、何とか力になってやる事が出来たのは、有力な友人達のお陰である。

二、くすし。宴会の帰り、すしを持ち帰ったところ、家人は寝てしまっていた。生ものは置けぬと思い、多量に

食べてしまった。夜中になって、あける、下すで苦しんだ。妻が何人かの医師に電話し、幸い同級生の一人が来てくれて、すぐ楽になった。一三日後、その医師と宴会で会った。「飲んでいいかな」と聞いたところ「いい薬を注射しておいたから大丈夫だよ」との答え、安心して飲んだ。良友くすしだと思った。今でも我が子、孫とこの小児科名医の世話になっている。

三、智恵ある友。「人皆我が師」と言った文人がいるが、小生の場合、師とする友は多い。高崎経済界のトップ。県政界の重鎮。県マスコミ界のトップ。県警刑事畑のトップ。地元建設業界の知性派等々錚々たる人物が多い。これ等は一、と重なっている。借越だが、畏友と云わせてもらう。また、身近かな市井の君子達も忘れる事は出来ない。「仕事にばかりとらわれていないで、心の平安の為に信仰の事を考えろ」と言ってくるクリスチャンがいる。地域の良寛さんと云われ、きれいな眼をしている。清貧に甘んじ、専ら心の豊かさを求めているものと思っていたら、こ子息がアメリカへ留学し、当地

でアメリカ娘と結婚したので、そこへ行ってきた、と話しに来た。作詞家で、何枚かレコードを出した友がいる。心は詩人である。今も夢を食べて生き続けている。時々立ち寄って明るい話題を披露してくれ、こちらも元気になる。豪農のせがれで、戦後の農地開放にあり、大変な思いをした友も時々来てくれる。あの土屋文明に本家と云われ、それとなく学資の援助をして、偉大な文学者を育てた。という話を聞くのも楽しい。いずれその話の続きを聞きたいと思っている。

話は変わるが、高中二年を終えて、陸軍幼年学校へ行った。入校の時、新生入生は皆戦闘帽に戦時服だった。学生帽に学生服は我が高ただけ。あの戦争一色の時に、自由闊達を貫いた高中の校風を愉快に思った記憶がある。その八月に終戦となり、高中の元級に戻った。僅か五カ月だったが、軍隊の疑似体験をした事になる。

三島由紀夫が、市ヶ谷自衛隊のバルコニーで演説し、直後に割腹自決したというニュースを聞いていた時、陸幼関係者から思わぬ同窓会開催の電話があった。忘れようとしているのに何を今更、と思ったが、何となく参加してしまった。今でもその人達と時々宴席をもって、親しくお付き合いを願っている。もし、あの戦争がもっと続いたら、今こうして相語っている有能有為な人材の多くは、既に鬼籍に入っていた事だろう。思うだにぞっとする。小生にしても、高中に戻って以来お付き合いを願っている多彩な友人達との、うれしい交わりを知らずに終わってしまった事になる。

近年、高高卒業生の大学合格率が非常に高くなったと聞く。また運動部の活躍もすばらしいと聞き、共に大慶と思っている。文武両道に秀でた名門高、六年も在籍し、人生の宝と云える多くの良友とめぐり会う事の出来た高崎高校に乾杯。

(補)ソメヤ代表取締役 48回)



高柳記念賞を受賞して



清水 宏紀

家庭用ビデオが開発されたのは、今から二十年前の一九七六年九月で、本年は二十周年にあたる。この二十年間

に、ビデオは世界に六億台普及し、映画・教育・記録物等のビデオソフトは百億巻をゆうに超えた。ビデオは娯楽に教育に一大文化を形成し、放送を記録し、時間をずらせて楽しむ(再生する)タイムシフトマシンとして、時間の活用を大幅に広げている。テレビの開発と相まってこの二十年間、情報改革に大いに寄与した。第二次世界大戦以降、経済発展のアンバランスが個人人の生活に大きな影響を与え、これらの生活の違いがテレビ・ビデオの映像を通じて人々の生活の中に入り込み、否応なく違いを知らされる。ソビエトの経済崩壊・ドイツの統一・中国の解放経済の促進等に、これらの映像機器の普及が大いに影響を与えたということができよう。

テレビの開発は、日本では高柳健次郎先生(後に日本ビクターの副社長・文化勲章受賞者)が、大正十五年に初めてイロハの「イ」の字をブラウン管上に映したことに始まる。世界的には、

米国をおさえたツボルキン博士の発明との名声が高いが、これは特許出願に不慣れな日本が高柳先生の発明を世界レベルにできなかったことによるといえよう。しかしVHSの開発は純日本のものであり、多くの特許を日本ビクターがおさえ、世界のビデオライセンサーとして、日本はもとより海外では、日本ビクターの海外ブランド「JVC」が著名となった。この話は二十世紀が生んだ多くの文化革命の中で、純日本の技術が世界を完全にリードした例として他に比べるものがない。

話しは変わるが、私とテーブルコーダーの出会いが高高一年に遡り、当時の放送部は大変充実していた。毎日昼休みに「クラシック音楽の紹介」「映画の紹介」そして「自作ドラマ」等々の番組を制作し、翠巒祭には無線機をつくったり、更には、紅白歌合戦を始めたのも我々の時代だ。聴衆の拍手を会場数カ所に設けたマイクの音を検波し音量に変え、機械的判定も行った。時が過ぎ、二人の息子の高高での翠巒祭で、数十年振りに紅白歌合戦を見て昔を懐かしく思い出した。

こんな縁があつてか、大学卒業後日本ビクターに入社し、テーブルコーダーの開発に従事し、かなり多くの世界の技術開発に成功した。中でも昭和五十三年、五十四年に発表したメタルテープ対応技術は、当時不可能とされていたメタル(純銀に近い)テープを世に送り出し、磁気記録の可能性を大幅に広げた。そして現在の高密度磁気記録の基礎となった。そのメタルテープに十五年振りに出会ったのは、前述のVHSビデオがマルチメディア時代にあつて、いよいよデジタル化必定の平成五年の時で、当時円高経済に苦しむエレクトロニクス業界、日本空洞化の真つ只中に、日本ビクターのビデオ事業本部長としてである。今までのVHSがそのまま使えて、二十世紀が生んだ文化を崩壊することなく継続し、しかもマルチメディアに不可欠なデジタル化を行う二十一世紀に向けてのマルチメディア文化時代に適合した技術を開発せんとした時である。ホームマルチメディアの中で重要な役割を果たす新技術として、久し振りに若手技術者と共に開発のリードをとった。一企業の私的財産としてはなく、広く五兆円以上に膨らんだVTR業界の今後を担うものとしてでもあった。幸い、松下電器・日立製作所・フィリップスの理解を得たのちに、ソニー・シャ-

プ・三菱・トムソン等の賛同も得て、二十一世紀に向けてのビデオの方向性を見いだすことができ、あわせて、VHSビデオの新技術に関する業績で、高柳記念電子科学技術新興財団より高柳記念奨励賞を頂くことができた。開発とは夢に日付を打つこと。『思いは命、努力は師匠』こんな思いが多くの開発者の心を動かとなり、業界をまとめ新しい道を拓く発端の開始とともに、この新開発商品デジタルホームビデオ(D-VHS)登場の予定である。

十五才高高一年の時ふれたテーブルコーダーがこうして生涯の開発の友となったのも奇縁であり、更に精神面で大きな影響を与えてくれた田中悦平校長の影響も大きく、感謝の念に絶えない。

(日本ビクター 常務取締役 58回)

平成7年度 高柳記念賞・研究



プレ 100周年

常任委員会より

総括委員長 重田精一
 母校創立百周年記念事業は、同窓会各位のご支援と学校当局のご努力により、所期の目標に向かって完遂を期しております。

同窓会館建設も順調に進められており、百周年記念誌の刊行も、それぞれの分野で進捗しているところであります。

記念事業の円滑な運営を期するため、従来主として学校当局と同窓会の間ですすめられてきた企画運営について、さらに拡大強化することが望まれるところであり、このために、教育後援会、PTAとの連携を密にして進めることが肝要であり、学校当局、同窓会実行委員会の四者を包括しての組織作りを計り、関係者間の意思の疎通を計り一体となつての活動を期し、常任委員会を設置しました。

第一回常任委員会を五月二十四日に開催いたしました。当日は午前十一

時より同窓会館建設の起工式が行われ旧講堂あとに会館建設の第一歩を踏み出した日でもありました。

本委員会は其の任務として、

●百周年記念事業推進のための連絡、調整、実施上の工夫などを機能的にとりからはからっていく「中核的運営機関」としての役割を担う。

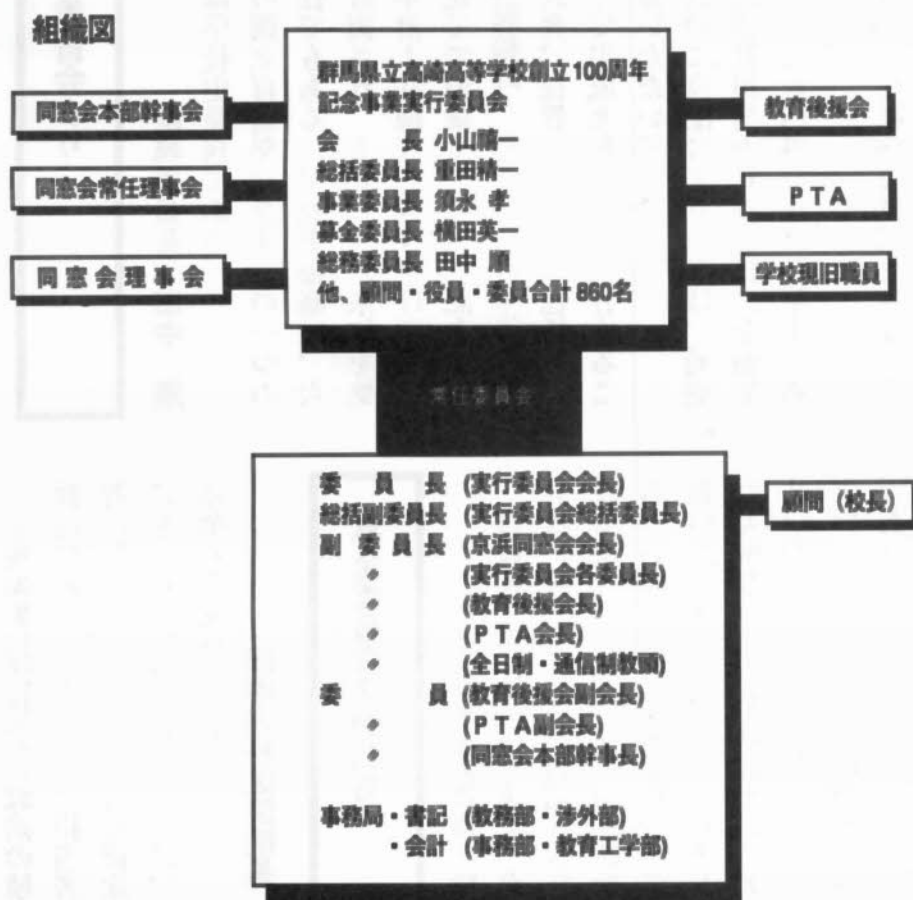
●とくに記念式典、祝賀会などの運営について具体案を審議していくこと。

これらを主な任務として進められていくことになっております。

百周年記念事業という大きな節目を迎えるにあたり、二度とめぐりあうことのない節目であることを考えると、関連する学校当局、同窓会実行委員会、教育後援会、PTA、四者の緊密なる連携のもとに、万遺漏なきを期し、最大限の努力を払い、目的達成のため邁進したいと念じております。

(重田医院院長 38回)

常任委員会組織表



群馬県立高崎中学校 跡建碑について

群馬県立高崎高等学校の前身、群馬県立高崎中学校は、その沿革史によれば、明治30年4月創立群馬県尋常中学校群馬分校と称し、高崎市赤坂町長松寺に仮校舎を設置、明治32年3月、上和田町に校舎落成、明治33年4月、群馬県立高崎中学校と称し、以来昭和13年12月、上和田の地より現在の乗附新校舎に移転したとされており、現在の高崎市立第一中学校のところが旧校舎の跡地であります。

その間、つどい学びし者4,500余名を数えております。

創立百周年記念事業の一環として、現在の高崎市立第一中学校の一隅に、群馬県立高崎中学校跡の碑を建立し、先輩諸賢のあとを偲びつつ、後に続く後輩諸君へお伝えしたいと念じております。

(重田精一)

事業委員会活動報告

事業委員長 須永 孝

事業委員会の委員長という大役を仰せつかりました、四十八期の須永でございます。同窓諸先輩のご指導を仰ぎまして力及ばずながらこの百周年事業を成功させたいと願っております。

平成二年の秋に事業委員会が発足いたしました。学校側の要望をお伺いし、会長はじめ同窓諸先輩のご意見ご指導を頂戴いたしながら、百周年の記念事業を計画立案させていただきました。それは以下の三点でありました。

一、(仮称) 同窓会館の建設

二、指月庭の整備

三、高中の碑建立

一・二の施工業者につきましては入札によりまして、母校とも大変縁の深い井上工業に決定いたしました。

三の高中の碑につきましては、三十八期から四十二期までの先輩が、母校玄関前にお建てになりました「翠櫛の歌碑」がございますので、詳細につきまして三十八期の重田精一総括委員長に一任致しますことが事業委員会で決定しておりますのでここでは説明を省略させていただきます。

さて、百周年記念事業の眼目は何と申しまして、篤志家や同窓生のご寄付を仰ぎ二億二千万円で建設されます

(仮称) 同窓会館でございます。

この会館の中心は四百人を収容する冷暖房完備の文化ホールです。座席は固定式で、簡便なテーブルもついております。ステージはかなり広く取っておりますので、ちょっとした演奏会にも対応できます。しかも、フロアーからステージの高さはわずか七十センチメートルしかありませんので、客席とステージとが一体感で結ばれやすいと思います。講演会や演奏会などを始めといたしまして、これから母校高崎高校で学ぶ生徒やご父兄・同窓会員等に大いに利用されるでしょうが、またさらに生涯学習の見地から地域社会の文化活動にも役立てることが期待されております。他に同窓会資料室も設けられて、母校の貴重な資料が、次の校史編纂事業に向けて保存整理されていくこととなります。

また「指月庭」につきましては、東京で造園設計にご活躍中の濱名光彦先輩(五十五期)の指導助言をいただきながら、現代の高高にふさわしい指月庭に整備して参りたいと思います。

以上が今までの事業委員会の活動のあらましです。同窓諸兄のご意見ご指導を仰ぎながら母校百年にふさわしい事業を達成して参りたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(梅玉堂(株)社長 47回)

総務委員会より

総務委員長 田中 順

担当は学校史発刊である。

母校の創立百周年記念事業の一つの大きな柱でもある。学校史編纂は、六年前に計画され、委員各位が衆知を集め、五年前より練りに練り上げて、上下二巻建てで旧講堂跡の同窓記念会館(本原稿脱稿時、正式呼称は未決定)、百周年式典、祝賀会風景をも包括したものととして平成九年度中に刊行することを承認いただいている。

学校長のご高配により上巻は、通史として国語科担当の箕輪明教諭を編集委員長として校内外で鋭意執筆中である。

下巻は、群馬県内では例をみない翠櫛群像を取り上げさせていただく。困難な作業であったが、数回の委員会を重ねて、すでに四十七名の恩師・先輩を選ばせていただいた。それぞれ執筆者を定めて出稿依頼をし、すでに脱稿しておられる方々もいる段階である。

なお百年にわたる綺羅星のごとき高の諸群像は、さだかではないが百二十年学校史の資料として供させていただくべく各期の代表の方々から資料提供をお願いしている昨今である。

同窓各位の特段のご理解とご協力をお願い申し上げます。

下巻編集長は社会科教諭の植原政明教諭である。それぞれの担当者・執筆者はしゃかりきに、ここを前途と作業に取り組んでおられることに、深甚なる敬意と謝意を表わしたい。

(田中齒科医院院長 51回)

募金委員会活動報告

募金委員長 横田英一

母校創立百周年記念事業の募金委員会は、平成二年秋、各期の常任理事・理事より推薦をいただいた総勢六八八名という大勢の募金委員のお名前を頂戴いたしました。その大所帯の募金委員長という大役を仰せつかり、これは大変なことになったというのが、当時の私の偽らざる心境であります。

さて、委員会が発足し諸準備をすすめて参りましたが、その段階では矢島哲雄書記をはじめとして高崎高校内の同窓会事務局に大変お世話になりました。特に募金について百パーセントの減免措置がいただけますように、関東信越国税局と、お忙しい校務の合間を縫って精力的に実務的なつめを行っていただきました。当時の高崎高校事務長の金子喜市事務部長には、募金委員会といたしまして感謝申し上げます。ばならないと存じます。

平成六年十月二十八日、高崎高校で

募金副委員長会議が開かれ、募金目標額二億二千万円の集め方が決められました。

篤志寄付(法人) 一億二千万円
同窓生 一億円

平成六年十二月二十日、募金副委員長と四十、八十期の代表の会が、高崎ビューホテルで開かれ、年令や卒業生の数等を考慮いたしました。それぞれの募金目標額が決まりました。

四〇、四六期 二五〇万円
四七、八、六八期 三〇〇万円
六九、八〇期 二五〇万円

こうして、平成七年一月より二年間にわたる募金活動がスタートいたしました。今その足跡を年度別にたどってみますと次のようになります。

平成七年一月、三月 五三五万円(一八五件)
平成七年四月、八年三月 五、六九七万円(二、一〇二件)
平成八年四月、九月 五、六一一万円(七四二件)

現金合計

一億一、八四三万円(三、〇二八件)
他に募金御芳名簿に記載していただきながらもまだご入金していただけない篤志寄付等が約三、〇〇〇万円ほどございますので、現在の募金総額は一億五千万円と申し上げてよいかと思えます。しかし、募金目標額の二億

二千万円にはまだ七千万円ほど不足しております。しかも残された募金期間は少なくなつてまいりました。加えてパブル崩壊の後の厳しい経済状況が相変わらず続いております。

平成八年十月十一日の募金副委員長と各期代表の会では募金目標額に達していない期につきまして特段の努力をお願いいたしました。その不足分は合わせて約五千万円あります。

これから小山禧一会長・古川功校長をはじめといたしまして募金副委員長の方々のご指導とご協力を仰ぎながら、篤志寄付をもっとふやして参る覚悟であります。一般同窓諸兄におかれましてはこの辺りの事情をご理解いただき、さらなるお力添えをお願い申し上げます。

(群馬トヨタ自動車㈱)

代表取締役社長 50回)



建設中の同窓会館

＜刊行案内＞

高崎高校百年史 高中から高高へ 百年の歩み

明治三十年(一八九七)高崎町大字赤坂町長松寺に「群馬県尋常中学校群馬分校」として創立され、まもなく本校として独立し、「群馬県立高崎中学校」となり、さらに戦後の学制改革で「群馬県立高崎高等学校」と改称して、いよいよ来年百周年を迎えようとしています。

昭和五十三年の「八十年史」そして、「九十年小史」という校史編纂の流れを受け、創立百周年記念事業の一環として、ただ今「高崎高校百年史」の刊行に鋭意取り組んでいるとご紹介します。

百周年の記念式典も記事に組み入れ、平成十年三月に発行する予定でありますので、その内容の一端をご紹介します。刊行に際しましては多くの皆様のご購読をいただきたくご案内申し上げます。

〔上巻の内容〕百年の歩みを、明治期・大正期・昭和前期Ⅰ・Ⅱ・昭和後期Ⅰ・Ⅱ・平成期の七編に分け、各時期の特徴的な出来事を中心に生き生きとした歴史を描くように努めている。

〔下巻の内容〕二十八名の執筆者により土屋文明、蝦山政道以下四十一名、恩師を含めて四十七名の人物を取り上げ他校に例のない本校独自の百周年史の人物誌になっている。高中・高高時代の貴重なエピソードも紹介されており、編年体の上巻を補って余りある親しめる人物誌になる予定である。座談会も高中時代(三十七、三十九回)、高中から新制高校移行期(四十七、四十九回)、高崎高校スポーツ黄金時代(八十回)の収録を予定している。巻末には人物事典をつける予定である。

■本書の体裁

書名 「高崎高校百年史」
上巻 通年編 本文一〇〇〇頁
下巻 人物史編 本文約五〇〇頁
体裁 B5判、上製本、並箱付
(上下巻セット)
表紙布クロス、箔押し(平・背)
完成予定 平成十年三月
頒布価格 五、〇〇〇円

■照会先

〒三七〇
群馬県高崎市八千代町二一四一
群馬県立高崎高等学校
学校史編纂委員会 係
電話 〇二七三二二四一〇七四
FAX 〇二七三二二四一七七二

「翠巒育英会のあゆみ」

上梓刊行



田中 順

かねてから準備を進め、祝辞原稿待ちであった標記の冊子が刊行された。創立八十周年の同窓会事業の一環としての学校教育環境整備の充実は、生徒・学校の意気昂揚の成果として八十年代前半に開花した。多くのチーム（野球・サッカー・軟庭・ラグビー）が全国大会に参加した。特筆すべきは、長き思いの宿願であった甲子園出場を果たしたことであった。多くの方々からのご好意で出捐された浄財は一億円を超えた。残念ながら初戦敗退であった。そのために半分近い余剰金が残された。そのうちの三千万円が同窓会に寄託された。おこがましいが、世のため人のために、同窓会礼讃になるが英知結集による決断により、その寄託された全額を基金として、同窓会事業が地域に還元できる制度が発足した。

財団法人翠巒育英会の記念誌発行は、地方のいち高等学校の同窓会がひと皮むけて、ささやかではあるが自校以外の地域の教育振興と充実のための育英事業が周知され、ご活用をお願いしたいと思いが込められている。現行では、低金利のため運用果実が乏しく管理費等を切り詰め、主事業費に充当する努力を払っている。

高崎市および日本財団への出版費用補助につい

ての働きかけは徒労に終わった。

干天の慈雨、雲霓ともいえる素晴らしい贈り物があった。八十五期の横尾英明氏（群馬大学医学部第一病理学教室勤務）からのご奇特な心尽くしがあつた。（ここにしみるいい話「万歳！ あしながお兄ちゃん」上毛新聞社発行）に多少の脚色を加えて、いまどきの汚穢の世に心あらわれる話として書かせてもらった。

自分自身の原点を高高とした素敵な後輩を持っていたことを誇りに思い、錦上花を添える行為に高高万歳を三唱したい。反面、不東な先輩として忤怩たる思いも禁じえない。生きていてよかつた。同窓の皆様と生きる喜びを共有したい。標記あゆみを紹介し、ご一読をお勧めする次第である。

（田中歯科医院院長 51回）

酒飲み会からの脱皮？

高高五十期作品展のご案内



石原 征明

「集まって酒を飲んでいただけじゃー、能がない。」これが、我々五十期生の間に生まれた自然な気持ちであった。高高五十期は、同窓会をよく開くほうである。全体の集まりを年一回は開くし、東京での集まりや、小さな集まりもある。母校のためにもいろいろ尽力してきた。また、運動関係でも、早くからゴルフのコンペを実施し親睦を深

めてきた。しかし、なにか精神的にも足らないものを感じていたのである。

高高五十期作品展は、もう少しましなことをしたいという気持ちの表れが結実したものであつた。いろいろな分野で活躍し、多彩な趣味を持つて生きてきた証を残したいと思つたからである。

はじめは「美術展」という名称が考えられたが、活躍の分野がかなり広いので、「作品展」ということになった。また、これまでの人生を夫婦ともども助け合つて生きてきたという意味と、同じ趣味を持つて歩んでいる人たちも多いので、出品の範囲は本人と配偶者ということにした。

何回も会議を開き準備を進めていったが、最初の心配は、はたして満足に開催できるだろうかということであつた。高崎シティギャラリーという立派な会場を確保した割には、出品数が少なく質も低くて、惨めな結果に終わるのではないかと、出品が募ってみると意外によく、四十数人の人が応じてくれ、出品数も百を超えることになつた。ジャンルも多彩で、多くの分野からかなり質の高いものが展示されるはずである。

高高五十期作品展は、平成九年（一九九七年）二月二十一日（金）から二十四日（月）の四日間、高崎シティギャラリーで開かれる。同窓生で力を合わせ、こうした催しを持つのはめずらしいのではないかと思つている。ぜひご覧いただきたい。

（共愛学園女子短期大学教授 50回）

●各部の活躍・活動

■ソフトテニス部

関東・インターハイ出場。それが今年の僕らの目標だった。それを見事に先輩達が成し遂げてくれた。

三年生も引退し、新チームになってからの最初の大会の新人戦。去年この大会で準優勝をしていたので、今年もそこまでは行こうと決めて大会に臨んだ。そして、目標通りに決勝まで進んだ。相手は農大二高。先生に「おまえ達はチャレンジャーなんだ。向かっていく気持ちを忘れるな。」と言われたので、皆向かっていく気持ちで試合ができた。結果は見事優勝。夏休みから、まずこの大会で良い結果を残そうと言って頑張ってきた成果がでた。



来年は団体でインターハイに出場することを目標として全員で努力してきましたと思っています。これからもOBの方々の御声援、御指導をよろしく願います。

■バスケットボール部

新人戦、総体、インターハイ予選と一年間の三つの大きな大会をすべて優勝という文字で埋め尽くしました。中でも、目標としてきた、インターハイ出場の切符を手に入れたのは、実に十



四年ぶりのことでした。

インターハイ予選決勝では、前半34-39と劣勢の展開。しかし、後半、粘り強いディフェンスからのカウンターと高高バスケットが爆発。終わってみれば80-53と大勝でした。

大型化の進む全国バスケット界で一八二センチが最高と小粒のチームだけに、高さのハンデを運動量で補おうと、フットワークそしてウエイトレニングと体力づくりに励んできました。また、「当たり前前の事を、当たり前前になす、ひたむきなバスケット」を一人一人が自覚し、毎日の練習に取り組んできました。

全国大会では、延長戦の末、負けというくやしい結果になりましたが、数々のすばらしい財産を残していただきました。それを土台に、今度は僕ら二年生がそれ以上の結果を残せるよう頑張っていこうと思っています。

■野球部

群雄割拠の夏の高校野球群馬大会が、七月十三日から行われた。

我が高崎高校のブロックは、春四強の農大二高、好投手鈴木ようする桐生を中心に展開されると予想されていた。

しかしこの予想に反して強豪校が相次いで姿を消していく中、我がチームは順当に二、三回戦を突破していった。

そしてシード校農大二高を破った関学大附との大きな山場を向かえた。序盤は高高ペースで進んでいったが、中盤、関学大附の持ち前の粘りで同点に迫いつかれた。しかし、ここから猛打高崎の本領発揮で食い下がる関学大附を振り切り八強進出を決めた。続く準々決勝も高崎の猛打は止まらず、九年振りの四強進出、そして甲子園まであと二試合に敗れ、夏は終わった。

今大会の見どころとなったのは、やはり我が高崎高校の快進撃だっただろう。これは日々の練習と、皆様の熱い御声援の賜物です。ありがとうございます。今後どうぞよろしくお願ひ致します。



朝日新聞社提供

SPORTS

運動部

- ①県総合体育大会
- ②関東大会
- ③インターハイ予選
- ④全国高校総体
- ⑤国体
- ⑥県新人大会
- ⑦その他の大会

ソフトテニス部

- ①個人 小坂橋・設楽 ベスト16
- ②個人 小坂橋・設楽 3回戦
- ③個人 小坂橋・設楽 ベスト8
- ④個人 小坂橋・設楽 2回戦
- ⑤個人 小坂橋・設楽 3位
- ⑥個人 小坂橋・設楽 ベスト8
- ⑦個人 小坂橋・設楽 優勝

バスケットボール部

- ⑥ 高高 優勝 73 (35 | 18) 35 | 18 49 樹徳
- ④ 高高 優勝 67 (33 | 44) 33 | 44 65 樹徳
- ③ 高高 優勝 80 (34 | 39) 34 | 39 53 樹徳

硬式野球部

- ⑦ 春季大会 3回戦進出

⑦第78回全国高等学校野球選手権

- 県大会 ベスト4
- ⑦ 秋季大会 1回戦

水泳部

- ① 400m個人メドレー 中西 3位
- ② 200mバタフライ 清水 優勝
- ③ 100mバタフライ 清水 3位
- ④ 50m自由形 小柏 3位
- ⑤ 400mメドレーリレー 小柏 3位
- ⑥ ⑦ 関東高校県予選
 - 200m個人メドレー 中西 3位
 - 400m個人メドレー 中西 3位

柔道部

- ① 団体 5位
- ② 団体 予選落ち
- ③ 団体 5位
- ④ 個人 長井祐介 準優勝
- ⑤ 個人 長谷川匡基 準優勝
- ⑥ 個人 矢田部拓也 ベスト8
- ⑦ 個人 廣神 宝 ベスト8
- ⑧ 個人 鈴木才樹 ベスト8
- ⑨ 個人 長井祐介 3位
- ⑩ 個人 長谷川匡基 準優勝
- ⑪ 個人 矢田部拓也 3位
- ⑫ 個人 廣神 宝 3位
- ⑬ 個人 鈴木才樹 3位

⑦学年別大会

- ① 団体 ベスト8
- ② 1年 60kg級 小暮俊介 優勝
- ③ 1年 71kg級 松村幸男 3位

⑦全日本ジュニア県予選

- 65kg級 廣神 宝 優勝
- 長井祐介 3位

⑦県強化大会

- 86kg級 長谷川匡基 準優勝
- 60kg級 長井祐介 優勝
- 71kg級 小暮俊介 3位
- 松村幸男 3位

空手部

- ① 個人戦 組手 2回戦進出
- ② 団体型へ決勝進出 7位
- ③ 個人戦 組手 3回戦進出
- ④ ⑤ 1・2年生大会 2回戦進出

剣道部

- ① ベスト4 (関東大会出場)
- ② 予選リーグ敗退 (二勝一敗)
- ③ 個人戦 ベスト4
- ④ 個人戦 ベスト4
- ⑤ 個人戦 ベスト4
- ⑥ 個人戦 ベスト4
- ⑦ 選手権 2回戦 個人ベスト8

弓道部

- ① 個人 中島昌博 2位
- ② 個人 小松洋平 4位
- ③ 個人 高橋正平 3位
- ④ ⑤ 県体二部個人

ラグビー部

- ① 3位

③花園県予選

サッカー部

- ① ベスト8(対前高)
- ② ベスト16(対常磐)
- ③ ベスト8(対前高)
- ④ ベスト8(対育英)
- ⑤ 選手権

陸上部

- ⑦ 群馬リレーカーニバル 優勝
- ⑧ 4×100mR
- ⑨ 3段跳び
- ⑩ 100m

- ⑪ 400mH 藤丘調弘 優勝
- ⑫ 300mSC 武藤俊史 3位
- ⑬ 走り幅跳び 岸 義真 2位
- ⑭ 走り高跳び 横田真一 4位
- ⑮ 3段跳び 藤丘調弘 5位
- ⑯ 円盤投げ 加藤高博 6位
- ⑰ 天野大樹 3位
- ⑱ 総合 4位
- ⑳ ⑦ 県高校対抗
 - 100m 大井 匠 3位
 - 400mH 浅見圭介 5位
 - 走り幅跳び 藤丘調弘 4位
 - 走り高跳び 岸 義真 5位
 - 走り高跳び 横田真一 3位
 - 円盤投げ 足立 普 4位
 - 4×100mR 天野大樹 4位
 - 4×400mR 5位
 - 円盤投げ 5位

砲丸投げ 大塚祐紀 6位
 ヤリ投げ 天野大樹 4位
 大井 匠 2位
 一部 総合 4位

⑥ 走り幅跳び 岸 義真 優勝
 三段跳び 岸 義真 優勝
 高跳び 横田真一 2位

円盤投げ 大塚祐紀 4位
 砲丸投げ 大塚祐紀 6位

⑦ 団体
 百m出場 大井 匠
 4×百mR出場 大井 匠

テニス部

① 団体 3位

③ 団体
 ⑥ 団体 ベスト8

軟式野球部

① 3位

⑦ 夏季全国高等学校軟式野球大会

⑥ 県予選 3位
 2回戦

卓球部

⑥ 団体 5位

⑦ 県強化大会男子シングルス

岸 啓之 3位

バレー部

① 3位

② 1回戦出場

スキー部

③ 3位

① 関東予選 回転 美細津仁志 45位

大回転 富沢延之 49位

③ 回転 秋山貴則 60位
 美細津仁志 62位
 宮村恵介 51位

⑥ 武尊杯大会 大回転 秋山貴則 56位

⑦ 春季大会 回転 富沢延之 26位
 森 有史 29位

大回転 宮村恵介 23位
 秋山貴則 39位
 宮村恵介 44位
 秋山貴則 48位

山岳部

① 14位

⑥ 2年 佐藤 寛 2位
 1年 高橋京介 2位
 田中健照 3位

⑦ 山田昇記念杯 佐藤 博 4位

⑦ 県民体育大会2部山岳競技大会 (団体予選) 佐藤 寛 4位

CULTURE

学芸部



囲碁部

○第11回関東地区高等学校 囲碁選手権大会

(東京都・6年連続6回目の出場)

団体戦 浅野 剛志
 青木 俊央

古田 烈史 (2勝2敗)

個人戦 松永 典之 (1勝3敗)

○第20回全国高校囲碁選手権大会

(東京都市ヶ谷日本棋院・7年連続7回目の出場)

団体戦 松永 典之 (2回戦)
 嶋澤 嘉伸 (2回戦)
 千木良泰彦

個人戦 松永 典之 (3回戦)
 嶋澤 嘉伸 (2回戦)

○第20回全国高等学校総合文化祭

囲碁の部 (北海道江別市)

個人戦 松永 典之 (3勝3敗)

団体戦 (県チーム) 嶋澤 嘉伸 (2勝4敗)

美術部

○高校芸術祭 (美術の部)

佐藤 喜仁 優良賞

吹奏楽部

○群馬県吹奏楽コンクール 銀賞 (次点)

県議会議長賞

新聞部

○群馬県高校新聞コンクール

写真部

○三浦印刷杯ヤングカラーフォトコンテスト 学校賞

マンドリン部

○第26回群馬県マンドリンフェスティバル 奨励賞

翠巒祭・高前定期戦

●第四十四回翠巒祭

今年の翠巒祭は天候にも恵まれ、入場者数も例年に比べやや多めだったし、イベントも思った以上に盛り上がりつつあった。表面的に見れば大成功だったと思う。

しかし、翠巒祭全体で考えると今の高生には高高に対して愛校心というものをまるで持っていない気がする。ちょっと考えてもらいたい。高生は高高で一体、何を学ぶべきなのか、おそらく大部分の人は勉強と答えるだろう。確かに高高は進学校である。勉強は第一かもしれない。でも、第二、第三と続くものはないのだろうか。勉強だけでなく予備校へ向け、などと言うが、すでに高高は予備校同然なのではないだろうか。そんな高高に対して愛校心を持つというのは難しいことだと思う。でも一人ひとりが変わっていかないと翠巒祭はこれ以上、絶対によくない。実行委員がどんなに頑張ってもあまりよくならないだろう。

では、愛校心を持つにはどうしたらよいのだろうか。手取り早いのは実行委員会に入ること。他には生徒会にきちんと協力すること。校歌を大きな

声で歌うべきときには歌うこと。



愛校心は学校においてはものすごいエネルギーの源であり、翠巒祭だけでなく学校全体が活発になると本気で思っている。

このように書いてくると内心が空の翠巒祭だったようだが、そんなことはない。良いところはたくさんあって書ききれないくらいだ。

翠巒祭では大いに自己主張をし、翠巒祭は毎年行わなければならぬと言えらるくらいになってほしいと思う。

(第四十四回翠巒祭実行委員長

長村 正孝)

●定期戦 「奮い立て高高」

今回の定期戦は惜しくも負けしてしまったが、なぜ負けてしまったのか。その敗因を考えてみると、その一つは、今までは午前中に一般対抗で負けてしまっても、午後の部対抗で見事な逆転をかざっていたのが今回はそのパターンが通用せず、一般で負け、部対抗も予



想外の大苦戦の末、同点になってしまったからであろう。では次回からはどうすればいいのか。その答えは3年生の結果にある。今回3年生は14・5―15・5と惜しくも負けてしまったがその差はわずかに1点であった。それに對し1、2年生は9―21、10―20とダブルスコアをつけられ負けしてしまった。その結果を見ればわかると思うが練習に多く参加した3年生は勝ち、少なかった1、2年生は負けてしまったのである。このことを1、2年生はしっかりと心にとめ、来年の51回定期戦は必ず勝ち、我々3年の屈辱をはらしてくれ。

定期戦の後に

は眼に見えるものはパンフぐらいしか残らないが、我々の心の中には鮮明に記憶が残っている。この記憶は年をとっても色あせることはないだろう。こんなすばらしい記憶を残してくれた定期戦がいつまでも生徒の手によって支えられ続けていくのを願っている。必勝、高崎!

(実行委員長 宮村 恵介)

第50回高前定期戦 得点表

部対抗		種目		一般対抗	
高高	前高	高高	前高	高高	前高
		水泳	1.5	7.5	
		綱引	0	9	
		ソフトボール	6	3	
		駅伝	3	6	
		玉入れ	6	3	
6	0	陸上競技	3	6	
6	0	バスケットボール	5	4	
0	6	バレーボール	7	2	
6	0	ソフトテニス	0	9	
0	6	卓球	2	7	
0	6	硬式野球			
6	0	軟式野球			
0	6	剣道			
6	0	柔道			
0	6	空手			
0	6	弓道			
6	0	テニス			
6	0	サッカー			
0	6	ラケット			
42.0	42.0	小計	33.5	56.5	
高前	75.5	合計	98.5	前高	

BOOK

本年度も御著書を寄贈して頂きました。

翠巒文庫

- | | |
|-------------------|-------------|
| ●著書 | ●著者 |
| 大災害をみつめる | 三木 克彦 (52回) |
| 雲仙記者日記 | 神戸 金史 (84回) |
| ルツェルンの鐘 | 田島 恵三 (43回) |
| 鬼人 橋本徳壽 | 原 一雄 (29回) |
| 増補 土屋文明私観 | 原 一雄 (29回) |
| 吉野秀雄の歌 | 原 一雄 (29回) |
| 和田学校を探る | 吉田 廣雄 (40回) |
| 詩集 遊子 | 角田 匡己 (53回) |
| 友禅染二代 | 本間 憲治 (29回) |
| 新編日本古典文学全集55 太平記② | |
| | 長谷川 端 (51回) |
| 戦後政治と日本国憲法 | 永井 憲一 (49回) |
| のっつけ 第19号 | 高中43会 |
| 秀嶺名案に 第8号 | 高高51期会報 |
| 詩の群読指導細案 | 村田 伸宏 (78回) |

最近の進学状況について

平成八年の大学入試は、現役合格率83・2%で、北海道大学十名(現役十)、東北大学二十三名(現役十九)、東京大学十七名(現役十五)、慶応大学五十二名(現役四十四)、早稲田大学四十七名(現役四十二名)、東京理科大

学百二名(現役八十五)に代表されるように、質・量ともに現役の頑張りが目立ちました。これは、保護者・生徒・学校が一枚岩となって生徒の進路希望達成に努力した結果であります。

これからも、将来、何らかの形で社会に貢献できる人間の育成に全職員で取り組みたいと思っております。

(進路指導部長 船戸秀道)

進路状況 全日制				内は現役					
大学	年次	6年	7年	8年	大学	年次	6年	7年	8年
北大		7(6)	7(6)	10(10)	早大		46(29)	52(36)	47(42)
東北大		29(22)	30(23)	23(19)	慶応大		50(38)	53(38)	52(44)
東大		19(17)	18(12)	17(15)	中央大		37(21)	62(51)	42(34)
一橋大		4(4)	4(3)	2(2)	明治大		64(36)	60(52)	64(54)
東工大		4(3)	7(4)	6(6)	日本大		94(77)	113(103)	95(88)
千葉大		7(6)	18(14)	11(11)	上智大		5(3)	9(0)	7(6)
京大		4(4)	6(5)	6(4)	法政大		39(22)	33(24)	22(20)
新潟大		21(15)	11(8)	18(16)	立教大		11(3)	5(2)	14(12)
筑波大		3(2)	7(7)	4(2)	東京電機大		4(2)	3(2)	4(4)
金沢大		3(3)	9(8)	5(3)	東京理大		88(63)	97(67)	102(85)
東外大		2(2)	3(3)	4(4)	芝浦工大		11(8)	10(7)	21(19)
群馬大		58(45)	41(32)	39(33)	成蹊大		3(1)	2(1)	1(0)
横国大		12(6)	17(15)	7(5)	学習院大		8(6)	4(2)	4(3)
静岡大		2(2)	3(2)	2(2)	青山学院大		12(4)	10(7)	24(21)
名古屋大		1(1)	3(3)	1(0)	武蔵大		3(0)	5(0)	1(0)
埼玉大		7(6)	11(8)	6(6)	明治学院大		13(5)	16(12)	5(5)
信州大		8(5)	2(1)	3(3)	同志社大		12(2)	5(2)	1(1)
横浜市大		8(4)	6(4)	1(1)	立命館大		25(8)	30(22)	18(12)
高経大		23(13)	31(27)	19(15)	その他		252(119)	198(150)	169(124)

種別合計 全日制				内は現役		
		6年	7年	8年		
A	国立	225(165)	222(169)	190(158)		
B	公立	40(21)	50(41)	25(18)		
C	私立	733(426)	767(578)	693(574)		
A+B+C		998(612)	1,039(788)	908(750)		
D	短大	7(6)	0(0)	0(0)		
総計(延数)		1,005(618)	1,039(788)	908(750)		
卒業者数		404	401	397		
現役進学者数		295	318	270		
現役合格率(受験者数/合格者数)×100		79.2%	88.6%	83.2%		

人事異動

新任者

森田 忠義 教頭→前橋高等養護学校 校長

萩原 重樹 教頭→退職

金子 喜市 事務部長→退職

佐藤 照 教諭→退職

市川 敏美 教諭→伊勢崎女子高校

吉田 武彦 教諭→藤岡高校

鶴生川隆之 教諭

及川 清 教諭→高崎女子高校

増田 泰 教諭→前橋西高校

荒木 隆 教諭→太田高校

中谷 賢一 教諭→渋川女子高校

小林 俊之 教諭→前橋商業高校

本多 嘉実 教頭→市立伊勢崎高校 教頭

高橋 洵 教頭→前橋清陵高校

荒木 勉 事務部長→太田高校総括事務長

戸塚 泰聖 教諭(英語)→富岡東高校

山口 和士 教諭(国語)→富岡高校

松本 正志 教諭(国語)→桐生女子高校

田村 修一 教諭(社・地)→高崎東高校

丸橋 覚 教諭(数学)→館林女子高校

三浦 昭久 教諭(数学)→安中高校

小林 政幸 教諭(数学)→渋川高校

猿谷 亮司 教諭(理・生)

佐久間秀人 教諭(体育)→渋川高校

↑生涯学習センター指導主事

平成7年度 高高同窓会 経常決算報告

平成7年度 経常会計				平成8年度 同窓会経常会計予算				
平成7年1月1日～平成7年度12月31日				平成8年1月1日～平成8年度12月31日				
費目	平成7年度予算	平成7年度実収入	備考	費目	平成8年度予算	平成7年度予算	増△減	備考
前年度からの繰越金	521,436	521,436		前年度からの繰越金	792,613	521,436	271,177	
入会金	2,972,000	3,132,000	全日制360人、通信制15人	入会金	3,000,000	2,972,000	28,000	全日制360人+通信制
維持会費	7,000,000	6,685,000	2,497人	維持会費	7,000,000	7,000,000	0	
利息	30,564	3,352		利息	6,387	30,564	△24,177	
雑収入	1,000	64,500	ネクタイピン代等	雑収入	15,000	1,000	14,000	
合計	10,525,000	10,406,288		合計	10,814,000	10,525,000	289,000	

平成7年度 経常会計				平成8年度 同窓会経常会計予算				
費目	平成7年度予算	平成7年度実支出	備考	費目	平成8年度予算	平成7年度予算	増△減	備考
会議費	1,100,000	1,290,765	平成8年度総会補助30万他	会議費	1,300,000	1,100,000	200,000	新年総会準備費30万
祝賀費	700,000	366,300	ネクタイピン代等	祝賀費	500,000	700,000	△200,000	卒業生記念品代
饗別費	300,000	275,000	平成7年転退職員へ	饗別費	300,000	300,000	0	
慶弔費	100,000	50,000	葬儀花輪代等	慶弔費	100,000	100,000	0	
通信印刷費	700,000	425,213	維持会費納入札状、宛名タック代等	通信印刷費	500,000	700,000	△200,000	維持会費納入の札状印刷
旅費	200,000	79,000	京浜同窓会出席者等	旅費	150,000	200,000	△50,000	
会報発送費	1,700,000	1,494,660	同窓会報郵送費	会報発送費	1,700,000	1,700,000	0	
会報作成費	1,800,000	1,387,753	同窓会報製作用料	会報作成費	1,600,000	1,800,000	△200,000	
事務費	700,000	496,340	人件費、事務用品代等	事務費	600,000	700,000	△100,000	
同窓会長賞費	100,000	42,510	ガラス盾	同窓会長賞費	100,000	100,000	0	
補助費	600,000	600,000	図書館30万、早稲体育会30万	補助費	600,000	600,000	0	早稲体育会30万・図書館30万
100周年準備費	2,000,000	3,027,034	100周年事業費印刷、録音、資料収集代等	100周年準備費	3,000,000	2,000,000	1,000,000	100周年記念事業特別委員会へ
雑費	50,000	79,100	維持会費返金等	雑費	50,000	50,000	0	
予備費	475,000	0		予備費	314,000	475,000	△175,000	
合計	10,525,000	9,613,675		合計	10,814,000	10,525,000	289,000	

差引残額 792,613円
次年度への繰り越し 792,613円

平成7年度 特別会計	
費目	金額
繰越金	12,499,120
利息	239,984
合計	12,739,104

支出の部 なし

平成8年度 創立100周年記念事業特別会計予算		
収入の部		
費目	平成8年度予算	備考
百周年準備基金より	11,875,968	定期預金11,064,355 普通預金834,713
同窓会特別会計より	12,739,104	全額定期預金
平成8年度経常会計より	3,000,000	
利息	300,000	
合計	27,915,072	

支出の部		
費目	平成8年度予算	備考
事業費	20,000,000	
事業活動費	2,500,000	会議費・通信費・資料収集費・振込手数料
予備費	5,415,072	
合計	27,915,072	

第95回 高高同窓会

新年総会のご案内

母校はいよいよ創立二〇〇周年を迎えますが、この記念すべき年の新年総会に向け私達六十六期生は諸先輩のご指導、ご助言を仰ぎつつ現在着々と準備を進めております。皆様のご期待に添えるようなイベントも企画し、高高同窓会の青春時代回顧のひとつとなるよう工夫を凝らしてまいります。

懇親会は懐かしき友と親しく語り合える場としたいと考えておりますのでぜひご出席下さいますようお願い申し上げます。

また当日は一月に新築落成予定の翠樹

会館にて東京大学教養学部教授・水山昭氏（高高六十三期卒）による「自然に学ぶ二十一世紀の技術」と題する講演会も開催致しますので多数の皆様のお出席を幹事期一同心よりお待ちしております。

期日 平成九年一月二十五日(土)
講演会 午後十二時三十分～二時まで
於 高崎高校・翠樹会館
總會 午後三時より
於 高崎ビューホテル
会費 五千円
(チケットお問い合わせ)
〇二七三(二五)九二二三 小林まで
(第六十六期生一同)

◎事務局だより
同窓会名簿について

株式会社タイムス企画による「職業別同窓名簿」の作成に、高崎高校同窓会は一切かかわっておりません。

新しい「同窓会名簿」は、NTT関東ビジネスサポートの協力により、平成九(一九九七)年五月に刊行の予定です。

なお、名簿についてのお問い合わせは、「同窓会名簿刊行委員会」(高崎市八千代町二一四一)が郵便で承っております。

第2回 高崎高等学校同窓会		(ネット)	
ゴルフ大会成績表			
一位	田島 創志 (94回)	優勝	武藤 誠一 (55回)
二位	武藤 誠一 (55回)	準優勝	堤 康高 (71回)
三位	沼賀 勝平 (55回)	三位	仲田 昇 (56回)
			平成八年十二月二十二日(金) 新玉村ゴルフ場